

寝取られ山猫

番前夜、横取りの雄に堕とされる強気受け

体験版

1

第一話 甘い匂い

「遅いぞ千早。今日の主役はお前だろ」

「来てやっただけありがたく思え」

「主役が遅刻して威張るやつがあるか」

「祝い事なんざ柄じゃねえんだよ」

「明日には番になるのにその口の悪さは直らないな」

「番になっても直さねえよ。あきらめろ」

岳が腕をつかんできた。おおかみの手は大きくて熱い。

「離せって。汗かいてんだ」

「顔が赤いぞ。熱でもあるのか」

「酒だよ。心配性かよお前は」

寄り合いの広間には街の顔役が集まっていた。
熊。鹿。おおかみ。みな岳の身内だ。

明日になれば千早は岳の番になる。うなじを
かまれて一生この男のものになる。そういう段
取りだった。

「岳。紹介しろよ。お前ご自慢の番候補って
のが、そいつか」

腹の底に響く声がした。

振り向くと金の髪の方が立っていた。背が高
い。肩が広い。たてがみみたいな髪が灯りで光っ
ている。

ライオンの獣人だ。

「……豪さん。来てたんですか」

「招かれたからな。で、こいつか」

「じろじろ見んな。減る」

「威勢がいい。猫のくせに」

「山猫だ。一緒にすんな」

「同じだろ」

「ぜんぜん違う。爪の鋭さも気の強さも段違いだ」

「ほう。気は強いらしいな」

豪が笑った。牙がのぞく。

ふいに鼻先を上へ向けた。口を半分あけて上唇をめくりあげる。空気を舌で味わうように。

「岳」

「なんです」

「この山猫、もう発情期が近いぞ」

千早の喉がひゅっと鳴った。

「は？ なに言ってんだ」

「甘い匂いがする。お前の首からとろっとしたのがにじんでる」

「しねえよ。鼻が馬鹿になってんだろ」

「俺の鼻を疑うのか」

「疑ってんだよ。失せろ」

「猫の強がり可愛いな」

「可愛いとか言うな。殺すぞ」

「強がるなよ。さっきから尻尾が膨らんでる。

体のほうがよっぽど素直だ」

「これは威嚇だ。馬鹿にすんな」

「威嚇ねえ。腰が落ちかけてるのにか」

「……黙れって言ってんだろ」

豪の鼻先がすぐそこにあった。いつ近づいたのかわからない。

「豪さん。彼は明日おれの番になります。手を出すのは――」

「出しちゃいない。まだな」

まだ。

その一言が背すじを滑り落ちていく。

「うなじはまだかんでないんだろ岳」

「それは明日に」

「明日まで保つかね。この匂いじゃ今夜あたりあふれるぞ」

「黙れよ」

牙をむいたのに声が上ずった。

広間の獣人たちがちらちらとこちらを見ている。鼻をひくつかせて千早の匂いを探るように。

見られている。嗅がれている。千早は腕で体を抱いた。

「岳。連れて帰れ。はやく」

「千早」

「聞いてんのか。帰るぞって言ってんだよ」

岳は動かなかった。豪を前にして立ち尽くしている。

「岳。お前さ」

「なんですか」

「こんな上玉を明日まで一人で抱えとけるのか」

「どういう意味です」

「そのまんまだよ。番ってのはかんで初めて番だ。今のこいつはただの発情した猫。誰のものでもない」

「……っ」

「広間に連れ込んだのはお前だぞ。匂いをまき散らして見せびらかして。狙われて文句が言えるか」

「狙うってあんた」

「言葉どおりに受け取れ」

千早は岳の袖を握った。返事はなかった。

豪が背を向ける。去り際に肩越しで千早だけを見た。

「猫。逃げるなら今のうちだぞ」

足音が遠ざかる。

残ったのは暴れる鼓動と首筋から立ちのぼる甘い匂いだけだった。

握った袖の中で岳の腕が逃げるように引かれていく。

「なあ岳。なんで黙ってたんだよ」

「帰ろう。匂いが強すぎる」

「おい。岳」

「人前であんまりその匂いを出すな」

「出したくて出してるわけじゃねえよ。お前のためにめかし込んできたんだぞ」

「わかってる。わかってるから、頼むから静かにしてくれ」

「岳」

「先に出ていてくれ。挨拶だけ済ませて追う」

千早の指先が冷たくなった。

番になる前夜なのにこの男はおれを抱きしめ
もしない。

広間の奥で岳が誰かと笑っていた。その背中
はもうこちらを向いていない。

甘い匂いだけが、置き去りの千早にまわり
ついていた。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

寝取られ山猫